

腰を振る弥生の姿に慎一も興奮しているのだろう、ペニスがなかでいちだんと大きくなるのがわかった。

「弥生ちゃん、俺もすごく気持ちいいよ」

「あつ。慎一のおチンメン、んふっ……もっと大きくなったあ」

いつもなら恥ずかしくて言えない言葉が、自然に口をつく。

弥生は無意識にさらなる快感を求め、腰の動きを速めていった。

「ああ……なんだか、変な気分……んんっ……だんだん、あそこが熱くなって……はうっ……痺れてくるのお！」

本能の赴くままに、レオタードを自らおろし、剥きだした左乳房に手を当てて絞るように揉む。それだけで、自慰のときとは比較にならない鮮烈な快感が全身に走る。

「んはあつ。気持ち、いい……こんな……んんっ……感じるなんてえ……」

弥生は顎を反らし、右手の人差し指を口に入れて声を殺した。そうしないと、隣りの部屋にいる紗耶香に喘ぎ声が聞こえてしまう。

しかし、腰の動きを緩めようとは思わなかった。それどころか、声を殺しながら逆にもっと大きく動いてしまう。

潤滑油の量も増し、膣がペニスをいちだんときつく締めつけるのがわかった。



「……弥生ちゃん、もう我慢できない、俺も動いていい？」

限界が近いのだろう、慎一が切なそうに聞いている。

「いいよ。してえ……あたしも……ああ……あつ……もつと、気持ちよくなりたいのお」
少女の言葉に誘われ、慎一がベッドのスプリングを利用して下からズンズンと激しく突きあげてきた。

勢いよく子宮口を叩かれ、脳天まで突き抜けるような甘美な衝撃が肉体を貫く。

「んくうっ！ 奥う！ ひうううっ！ し、慎一……奥までえ、きてるう！」

弥生の口から、囁み殺しきれない歓喜の声がこぼれた。

二人の腰の動きがピッタリ合い、ベッドのスプリングがギシギシと音をたてる。

「ああっ、すごい……こんなのって……んくううっ……こんなのって、生まれて初めて……ひあああつ……おかし……おかしくなりそうっ」

弥生は、セックスの快感にすっかり溺れていた。

ずっと、全身を駆けめぐる悦楽の波に浸っていたい。そんな思いが、少女の心を占めていた。

しかし、悦びの時間は長くはつづかなかった。

弥生を貫いているペニスがビクビクと痙攣^{けいれん}し、爆発の気配を示しはじめる。

「弥生ちゃん、俺……もう、出ちゃうよ」

限界を悟った慎一が、かすれた声で訴えた。

弥生にはその声は届いていない。結合部から発生した熱が、爆発寸前のマグマのように腰の奥で大きくなり、先ほどのエクスタシーとは桁^{けた}違いの快感が訪れようとしている。

「ああっ、変よ、変なの……あたし、はふっ、どうかなっちゃうっ。もうっ、んんっ、なにかくるっ。きちやうよおっ！」

ツインテールを振り乱して、弥生は腰の動きを激しくした。意識したわけではない。そう動きたくなつたから、本能に従つただけだ。

「だ、ダメだよ、弥生ちゃん。そんなに動いたら……」

慎一が、切羽つまつた声をあげる。

だが、快楽の虜^{とりこ}となつた弥生に、彼の言葉の意味を考える余裕などなかった。下腹部全体にひろがつた熱い塊^{かたまり}を爆発させたい、という牝の本能が、今の少女のすべてだった。

「ああっ、ああっ、んくううううううううっ！」

限界を迎えた快楽のマグマが頭頂部を突き抜け、弥生は大きくのけ反りながら、指

を囁んでくぐもった悲鳴をあげる。

その瞬間、肉棒への締めつけも強まり、ペニスから白濁流が一気に放出された。大量の熱い精がドクドクと音をたてて、少女の内部を満たしていく。

「あ……あっ……あたしのなか……なにか、出てる……熱いのお」

膣とともに心まで満たされるような充足感に抱かれ、弥生は慎一に向かってグッタリと倒れこんだ。